



松屋外集

卷三

三十七

15
1400
4止



15
1400
4

松屋外集卷之三

目録

○第一舞蹈考

○踏舞 ○拜舞 ○再拜舞蹈

○左右左 ○三礼 ○かき木

○推柴の袖 ○市塔正塔 ○摘

○第二熊白檮甘橙標



高田早苗
三田早苗
高田早苗

松屋外集三

目一

○くはつら ○久万と子詞

○まろば椎 ○市紫五紫 ○尙

○一位の木 ○三木 ○一木

○第三白楮血楮 ○再耕食飯

○真と志良と通ふ例 ○白管

○白雪深雪

○第四加多橙

○第五海部の文

○大海の裳 ○海部乃太刀

○大瀨の蒙 ○舞踏の文
○第五齣の文

松屋外集卷之三

華頂殿亞老平小山田與清著

平戸藩士源牟田部寛徳校

第一舞蹈考

舞蹈マカまゝマカ踏舞マカ拜舞マカ礼記マカ小不知マカ手
之舞之足之踏之云云孟子マカ離婁マカ小不知足之踏之
手之舞之云云とあると出處と云ふその字面六朝

のこの小入る。梁簡文帝啟小徒懷舞蹈之心終愧
清風之藻云々元帝與蕭詵議等書
瑞象放光倏將旬日舞蹈之深
形于寐かど喜悅の事を用たり 唐代少々々々

よらういよらうの作法ふやちうん。唐書礼樂志九

小皇帝元正冬至受群臣朝賀而會前一日尚舍設

御幄於大極殿云云宣制曰履新之慶與公等同之

冬至云 在位者皆再拜舞蹈三稱萬歲又再拜云云

履長光祿卿進詣階間跪奏稱臣某言請賜群臣上壽侍

中稱制曰可光祿卿退升詣酒尊所西向立上公詣

酒尊所北面尚食酌酒一爵授上公上公受爵進前

北面授殿中監殿中監受爵進置御前上公退北面

跪稱某官臣某等稽首言元正首祚冬至云天 臣某

等不勝大慶謹上千秋萬歲壽再拜在位者皆再拜

立於席後侍中前承制退稱敬舉公等之觴在位者

又再拜殿中監取爵奉進皇帝舉酒在位者皆舞蹈

三稱萬歲皇帝舉酒訖殿中監進受虛爵云云

杜審言傳文藝傳上武后召審言將用之問曰卿喜

否審言蹈舞謝后令賦觀喜詩云云白氏長慶集

賀雨詩卷一冠珮何鏘々將相及王公蹈舞呼萬歲

列賀明庭中云云同書十五卷渭村退居寄禮部崔侍

郎翰林錢舍人詩傳呼鞭索々拜舞珮鏘々云云

慈恩傳六の卷小鑾輦至此御膳順宣凡預含靈孰不

蹈舞云云七の卷王公百辟法俗黎庶手舞足蹈

歡詠德音内外揄揚云云たゞあまの後の書ハ蹈

舞拜謝宋史禮志再拜舞蹈同司馬たゞ所見おろし吏

學指南禮儀部舞蹈以手曰舞以足曰蹈云云禮記

樂記注註疏本卅七の卷小不知手之舞之足之蹈之歡之

至也鄭司農云疏ハ嗟歎之不足故不知手舞之足之蹈之也

者言雖復嗟歎情由未滿故不覺揚手舞之舉足蹈

周禮春官樂師
掌國學之政以
教國子小舞凡
舞不佞舞而
羽舞不皇舞而
旄舞有于舞
有人舞法也
若手舞之去
謂之舞人舞無
所執以手也

威儀四方以羽
廟以山川以千
早曉以堂
之初丁

之而手舞其體足蹈其地也。とある。よ。其義審也。
本朝少々續日本後紀十二の卷。小管原清公薨云云。弘
仁九年有詔書。天下儀式男女衣服皆依唐法五位
己上位記。改從漢樣。諸宮殿院堂門閣皆著新額。又
肄百官舞蹈。如此朝儀。益得關說云云。内裏式上元
正朝賀式。小王公百官共稱唯再拜舞蹈。武官俱立
振旆稱萬歲不拜舞云云。中卷。新嘗式の
条。少々又ゆ。な。と。え。下。

嵯峨天皇の弘仁九年以来の例なり。これ所作ハ
侍中羣一の卷。蔵人初条。小拜舞先再拜。若有官者。笏
置左手下。地上起再拜。次乍立垂袖。左右左次卧左
右左。次乍居小揖。次乍立再拜。次乍立揖云云。拾芥
抄中末。卷。儀。小舞蹈事再拜置笏立左右左居左右
左取笏小揖立再拜云云。源氏河海抄相壺の卷。小舞蹈
八手ハ舞豆の蹈也。北山記曰再拜次左右左立次

左右左居揖後立拜次小揖今按先立小揖次再拜
次置笏於左立左右左次居左右左次取笏居揖次
立再拜次小揖退出已上內院之儀也他所只再拜
退出一說前中後揖有無依官也云云作法故實小
舞蹈事依事或二拜或舞蹈也舞蹈者立左右左其
後居左右左也是臣下之舞蹈也此躡顧左之時以
右手取左端袖上以左手入左袖內下方左手在袖

內也右准可知之顧左之時面不屈不垂有口傳天
子者右左右也朝覲之時如此春宮先々有沙汰左
右左右左右之間人々所為不同一說云知世之院
并國母之外不舞蹈其外於院宮并人臣者二拜也
於神者兩段再拜再拜之間申所願歛於佛者三禮也昔法皇
御所奏慶人等不帶劔笏三禮也寬平法皇圓融院
一條院等類如此延喜帝朝覲宇多法皇之時如尋

常法皇曰。我受盧那形學。三耶法。准佛躰。置笏叉手。可三礼。其後朝覲如此。白河院始而雖為法皇行治。世事人々帶劔笏拜踏如常。然而猶俊明卿置笏三礼云云。又云帶弓箭人舞蹈異說。事帶弓箭人不為舞蹈也。又八條相國三條內府舞蹈之由。見野宮記。又大炊御門左府經宗公說。不為舞蹈云云。多不舞蹈之說。用之。少者不拜云云。本文心不正之由。見野

宮記。但介者不拜。常用之說也。又例儀之時。傍卿舞蹈相國公房或罷居罷立。舊記也。如何可為了見者也。云云。明月記。寬喜三年正月九日。六条小抑叙列。化法所教訓無相違。由兼之。其中伊成二拜。元衡氏通二拜。置弓立左右。左坐左右左。乍坐一拜。立二拜。三人相替。若其故候。歟。答云。御給事實。以嚴重承說。彼二人作法。帶弓以前不舞蹈。只二拜之由。稱大炊

御門左府説入道左府實入道相國頼縁者皆用其説近代之儀也普通之説皆以舞蹈坐左右左許畧之儀惣不聞事也只至愚之故歟其少將之躰不足言之由承之以此問不舞蹈之説本文介者不拜云云以み者不拜之本文帶弓箭拜而不舞之儀無性躰事歟兩公之不知史書之間妄推量之儀歟依無及云云乃説を考ふ先再拜して笏を左手に

下の地上に置次立多々下袖を垂て左を顧右手は左の端袖の上を取左手をば左袖の内下方カタ小入然イハれど左手は左袖の内ウチにあるなるこれカミを左とゆふ次右を顧左手は右に端袖の上字取右手をば右袖の内下方入イふなる此とカミ字右とゆふ次又家初ハジメのぶとく左を顧カミて行イくとイウく左右左三度タビなり然サて坐キて又前マエのぶとく

左右左を行ひ、地上に置たる笏字取立て再拝し、
 小揖し退く少づのかりき人の説あれど大
 概のくれおぐ心得一荷田在湍が嘗會具釋
 七のふり、拜舞ハ再拜舞踏スル也、再拜ハ本ヨリ
 拜謝ノ儀、舞蹈ハ欣躍ノ義ニテ、手ノ舞、足ノ踏ヲ
 知サル意也、其儀先立テ、笏ニ兩ノ手ヲ掛テ再拜
 し、次ニ居テ再拜し、次ニ笏ヲ右ノ傍ニ置テ立テ

左右左ニ舞次ニ居テ左右左ニ舞次ニ笏ヲ把リ、
 立テ初ノ如ク再拜ス、イツトテモ拜舞ノ儀ハ如
 此といふ、武官弓箭字帯はる人ハ、舞蹈せざる
 又法皇の御所まては三礼三礼ハ三拜マて、
僧家の礼マて、或
 ハ舞蹈するニ儀あり、次郎百首、俊頼歌、かハ
 木を志ひのしづ枝一本作さえぞおろつて左右左ま
 下やふまろぶづよ一本作まろぶらんと詠たるも、柏木

ハ兵衛府の異名ち、衛門府ふりいひたるべし。大和物語上、良少将兵衛の佐たりける、監の命婦、
 下草おいぬと、女の名とよむ。か、は本森の
 下草おいぬと、女の名とよむ。か、は本森の
 二ふも、尺ゆ、拾遺、雑恋、中納言敦忠兵衛、佐、
 多系時、志のびていひちたて、侍々、おと、
 吾、きこえ、侍々、くれ、右近、人志、
 歌童蒙抄、四、兵衛の条、出、末句、ち、
 とあり、又拾遺抄、第九、ア、右近少将季繩、
 スメノ歌ナリ、中納言敦忠兵衛、佐、ハベリケル

トキニシノヒテイヒチギリケルコトノ、世ニキ
 コエテハベリケレハワカハシケル、兵衛ヲカシ
 ハギトハイフナルベシト、枕草子春曙抄、
 三、小、柏木、葉守の神のま、むらむら、
 か、御抄三、兵衛佐尉、な、い、むらむら、
 雲、御抄三、下巻、異名部、左右兵衛、か、
 云、能因歌枕、兵衛を、か、木、源氏、
 ど、ある、よ、れ、兵衛の稱、た、源氏、
 の、右衛門督、河海抄、十四、衛門、柏木、
 色葉集、上、三、小、左右衛門、木、み、え、
 一、小、柏木、君、い、ふ、柏木、の、巻、小、失、
 百、木、長、而、守、門、間、とい、お、こ、
 百、木、長、而、守、門、間、とい、お、こ、

通稱とたこ由、さるをふと兵衛の事といひしを
 十五、色葉和難抄、四、八雲御抄三、下、藻鹽草、十五、
 竹集三、ふち、か、木とは兵衛のかう名、志、
 のしづ枝ハ、志、ハ、横の通音、て四位、い、い、よ
 せたる、ち、あ、平家物語 四の、頼政、正下の四位、ふ
 志、ば、く、あ、三、位、を、心、は、け、は、
 州、ぼ、く、た、よ、な、れ、ハ、本、の、か、く、志、い、字

拾て世を渡る此、歌源平盛衰記十六、ハ、二
の句たよ、け、と、家

集、ハ、飛鳥井雅親卿の亞槐集 祝、雅俊朝臣四
 みえ、代、部

品、一、侍、一、時、東山殿、よ、賀、一、仰、ら、れ、て、彼、朝、臣

小、よ、み、へ、給、ち、う、一、文、よ、く、ま、が、め、と、み、の、う

と、一、さ、ち、は、つ、み、や、あ、さ、る、志、い、柴、の、袖、又、お、れ

ト、時、よ、み、へ、な、ま、一、一、が、買、の、め、と、み、よ、ち、ち、や

権、柴、の、袖、の、紫、を、や、ら、ち、ね、む、ち、と、よ、み、ハ、雲、御

抄三の下 藻鹽草十五 小、四位の異名志ひ柴の

又ゆ公任集、蔵人られまをなむ、ぬまひでふか

ぶまひづまあら、推字おらひとて、「おれま

まらも流るる、推柴のかまらむむまらるる

しれあは、「し 志ひ柴は流るる衣はか

し此男字よま思もさうちんとある、四位

をよまらるるふや、古く推柴の袖といふ、貴賤

通用の喪服の名也

秘蔵抄上、みまのちかくてたま

ふがよらるる推柴の袖云、推柴は袖とまいろ衣

をいふ云、柴花月の宴、宮々おらるるか、

のまみそえとありれよか、おちが諒闇な

とど、これおひ、おらるる、これた、一天

下の人鳥、れやうな、山の推柴残りトト

ゆふ、あをれよちむ云、後拾遺、哀傷、圓融院

の法皇うせまをぬいて、又の、御をての

さな、れ比ふやあ、けむ、内は侍、御乳母の

藤三位の局、み色の紙、老法師の手、

ね、書て、入さを、一條院御製、

は、まか、思ふ、都、糸、

は、志、此、歌、枕、草、子、春、曙、抄、七、の、卷、仲

文集、なごよ出て、異説あり、千載、雑中よ、十月、重
 服、なごつて、侍々、又の、の春、傍官、ごも加階
 侍、け、る、子、や、て、よ、る、中納言、長方、も、ろ、人、の、花、さ
 く、春、を、よ、る、ふ、り、て、な、る、は、推、柴、の、袖、此、歌
 家集、月詣集、雑、上、ふ、も、尺、ゆ、又、千載、哀傷、よ、大炊、御
 門、の、右、大、臣、の、侍、を、て、後、七、月、七、日、母、の、三、位
 大納言、實家、た、れ、を、よ、る、は、い、く、ま、は、け、る、權
 け、き、袖、た、れ、を、よ、る、か、や、ぬ、つ、く、あ、り、れ、や、る、む、
 嘉喜門院、御集、よ、正平、廿三年、五月、五日、ご、ご、の
 式、な、ご、や、お、が、い、で、ご、一、品、の、宮、よ、る、今、ハ、又、あ
 や、え、れ、草、を、引、の、つ、く、う、ま、ぬ、ご、か、る、ま、い、ご、の
 袖、御返、し、思、を、ば、よ、あ、や、め、し、ご、ぬ、ま、い、柴、の、袖

よろね、ぬ、の、か、る、づ、い、ご、は、志、づ、枝、ハ、下、階、也、左、右
 な、ご、所、見、舉、る、は、違、ち、し、左、ハ、拜、賀、舞、蹈、の、や、も、也、衛、門、兵、衛、の、佐、共、ハ、相、當
 從、五、位、上、ち、る、も、が、從、四、下、小、叙、は、ご、と、柏、木、を、志、し
 の、下、枝、ハ、折、の、つ、く、と、よ、み、舞、蹈、左、右、左、を、行、ひ、卧
 轉、づ、れ、ご、の、あ、ご、の、喜、悅、ハ、不、堪、よ、り、也、さ、く、左、右、左
 ハ、臣、下、の、作、法、み、て、天、子、朝、覲、の、時、ハ、右、左、右、也、俗、世
 淺、深、抄、下、卷、東、宮、い、づ、れ、ご、を、決、ち、る、説、な、け、ご、也、
 作法、故、實、

時レ空ギふくくくのふつくや、伊勢ふくハ笏なりのよ袖
 字引て八度行ふと、倭訓栞の廿六のいてと、西段再
 拜よの酌酌せしや、新儀式の四の三代實録の四十
 卷空穂物語、後陰下、祭の使三處、吹上の上二處、同
 下三處、歲閑、中、國讓、上の一、樓の上、下
 の枕草紙、春曙抄一、同五、今取のつや、上卷、榮花物語初、源氏
 物語桐、西宮記、北山抄、江家次第、建武年中行夏公
 事根元、日中行夏、世俗淺深抄、名目抄、など、所見枚

擧ツげづららぬど、これ舞蹈と書カは音ノよぶくうと
 よめららまる、拜イ舞ブといふ、おたり、蹈ム舞ノ字面は、
 漢籍カラハミねく、尺えて、本朝の故實は用ひび、又連
 歌の家ら、まいぶみつつる、類聚名物考、人事部十二た
 とハ柳ウ營イ字やなだのゆなみ、新續古今序葉門字く
 はれかど、風雅、雜下、新撰六帖二、二ハ處夫木、雜十三、二ハ三處、金キ錢セ花ハをあらわ
 ぬのせふのちね、夫木、夏三、などいふ類ちる、一、やれど

それ、私の定めて、そのあり、うらぬこと、あや、

第二熊白檮甘橙櫟

△櫟也

新撰字鏡 丁左 四十七 木部、攝時葉、反、席豆也、鳥枕、久

万加之、又、久万豆、々、良云云。○按、席豆也、とあるは、

久万豆、々、良、ふ、叶、つ、久万加之は、櫟也、といふ櫟

の字、ハ、檮檮、などの誤り、それよ、よ、よ、たる訓な

る下、

古事記中卷、丁左 廿九 垂仁記、在、甜白檮之前、葉、廣、熊

白檮、令、字、氣、比、枯、亦、令、字、氣、比、生、云云。○按、甜白檮

之前、は、甜白檮の生立るよ、よ、よ、名、肩、岡前、な、あ、

其處、在、白檮、を、熊、白檮、を、い、つ、あ、甘、白檮、も、熊

白檮、も、同物、な、と、知、つ、た、甜、白檮、ハ、其、實、の

甜、ふ、ふ、れ、る、名、熊、白檮、ハ、葉、の、廣、大、な、る、よ、よ、と

る、名、之、あ、ま、マ、テ、バ、シ、ヒ、の、事、ハ、實、大、ま、く、味、甜

久万加之、櫟也、といふ、云々、分、之、櫟、也、ト、イ、ル、引、
書、ノ、文、〇、ノ、上、ニ、其、画、リ、擧、ゲ、テ、ハ、キ、エ、カ、タ、キ、欽

くして、食料と次づく。其葉他の白檮カシより、廣大
 なるが、葉廣熊白檮カシともいふ之、熊ハ物ハ大なる
 小の辭少く、馬鞭草ウマヅラも今俗カマエビと呼ヨビて、尋
 常の蒲菊ユヅより、葉實共ハ大なるを、熊葛クマヅラとも、熊蒲クマユヅ
 菊キクともいひ、之、熊蒲菊カマエビ通音也。新撰字
 鏡木部ハ檄久万波ハカ自加弥カミ本草啓蒙廿八卷ハ食
 菜莫クマザン椒カシなるがある物ハ、秦椒シムロより、大なる

ハ、久万クマといふ詞ヲ冠カらせたる、熊笹クマササ熊柳クマヤナギの類ハ
 之、常のよきも葉の大なるといふ少く、おれ、
 同卷 五十五 景行記、倭建命の御歌ハ、幣具理能夜
 麻能、久麻加志賀波素宇受尔佐勢云云。
 同下卷 卅一 雄略記、天皇の御歌ハ、幣具理能夜麻
 能許知基知乃賀比尔多知邪加由流波毘呂久麻
 加斯云云。按日本紀、景行紀の御歌ハ、幣遇利能

夜摩能志羅伽之餓延鳩于受拜左勢とよませ給
 了を思ふ。白檀ハ真檀ト通ひて總て此檀トわ
 たれり稱なれば熊禱の事ト白檀トありて
 同書下卷十九 允恭記ト天皇愁天下氏々名々人
 等之氏姓忤過而於味白檀之言八十禍津日前居
 玖訶瓮而定賜天下之八十友緒氏姓也云云。○按
 己ノ垂仁記ト甜白檀之前の業廣熊白檀の事尺

由甜白檀熊白檀同物なるよりハ其この今按よ
 了の如し。

日本紀十三卷五 丁 允恭紀四年ト於味檀丘之辭
 禍戸岬坐探湯瓮云云。
 同書廿四卷十六 丁 皇極紀三年ト入鹿臣雙起家於
 甘檮丘云云。
 同書廿六卷八 丁 齊明紀五年ト甘檮丘東之川上

造須弥山云云、禱此云柯之云云。

日本紀竟宴歌延喜六年式部卿是忠が得雄朝孀稚子

宿禰天皇小久保

甘檉乃丘乃久可太知支与忝礼波尔已礼留

多見无可波祢數末之幾注よ、あまみりのうらみ

くうとよき急て、くうとよき急て、りふあまこ

こちうむ人もまこくいはさわれらむ人いやはれ

とよと云云。

延喜式神名式上十五丁右大和國高市郡部アマカシマス甘檉坐

神社四座並大、月次、神嘗云云同式下四丁左近江國伊香

郡部、甘檉前神社云云。○按式の印本、甘檉前

をイチヒサキと訓われど、古事記傳廿五卷、廿丁右

マカシノサキと訓るふ従タカ一、又檉イモ同物少て、

熊檉甘檉檉クマシノイモカシノイモいづれ、今の万天婆志マテバシ比ヒちうと見より、

下よいつてのども

古事記中巻景行記に倭建命即入坐出雲國欲殺
 其出雲建而到即結友故竊以赤檮作詐刀為御佩
 云云。○按古事記傳廿七卷丁右に赤檮ハ伊知比
 能紀と訓づ。市柴五柴イシなるイシ此木の柴イシ
 づ。此木今伊知比と云伊知加志イヒとい云て。
 檮カシの類なり云云同廿五卷左に古赤檮イシ字伊知

比ヒふあて、白檮カシをカシ加斯カシふあてたカシなり然るカシふ
 加斯カシ又白加シラカシ斯カシと赤加アカガシ斯カシある故に、白檮赤檮の
 字其シまシなれやも。又檮の字ハ多く伊知比イヒに
 用モテるカシ此カシ加斯カシに用ひし事カシありしや。近
 江國の神社の名の甘檮アマカシなるカシアマカシと訓
 づれど加志カシと伊知比イヒとは、いよく似たる木カシ
 云云カシ注して檮ハ楮カシの一種に熊檮カシ甘檮カシ皆同

日本紀廿一卷用明紀二年舍人迹見志禱云云。
自注迹見姓也。赤禱名也。志禱此云伊知毗云云。
醫心方廿九卷五草部橡實本草云味苦微温无
毒主下利厚腸胃肥健人七卷經云味澁无毒非菓
非穀而取益人服之者未以斷穀養性要集云啖橡
為勝无氣而受氣无味而受味消食而止利令人強

健和名以云云。○按此文寫誤あゝ讀得るゝゝ也。
今ハ此校便なり。然橡實ハ櫨の實なり。和名
杪深色都流波美と俗ドングリ、ジンダグ
リなどいふ物なり。是本草綱目菓部本草啟
蒙廿六卷卅字考知一。
新撰字鏡丁右四十七木部杞祛紀反枸櫞也。此乃木
又一比乃木云云丁右四十八櫟正音来的反木名

借、舒灼、反、鄙也。又餘灼、反、地名。一此乃木云云。
 和名抄十七卷、巢類部、標子、雀、禹、錫、食、經云、標子。
 上音、歷、和、相似、而、大、於、推、子、者、也。同卷、巢具部、標
 名、以、知、此、標、其、實、林、知、此、乃、加、佐、孫、炎、曰、巢、之、自、巢
 者、也、云、云。○按、標、子、ハ、推、子、ニ、似、了、大、也、と、い、ふ、標
 林、ハ、其、巢、字、累、者、と、い、了、な、ら、ど、万、天、婆、志、此、の、形、状
 違、事、な、ら、ど。

萬葉集十六卷 卅丁 乞食者詠長歌 右

八重疊平群乃山尔四月與五月間尔藥獵仕
 流時尔足引乃此片山尔二立伊智比何本尔梓弓
 八多婆佐弥此米加夫良八多婆左弥矣待跡吾居
 時尔云云 軒言天皇御好
 夫木抄 廿九 雜十一、標、歌、貞應二年、百首、木民部
 卿為家

おふみ川志ぐる、秋のしらべいぶよ山や嵐の
多きかたらむ、十一、縣、海、百、貞、歌、二、三、百、首、本、外、集

古事記應神記天皇御歌よ、右、同、卷、具、部、二、

伊知比韋能、和途佐能、途素波都途波、波陀阿

可良氣美志波、途波途具漏岐由惠美都具理能、曾

能那迦都途素云云、○按古事記傳、廿二卷、四十三

伊知比韋能ハ、櫛井之小、地名、書紀、允恭卷

に到倭春日食于櫛井上とあり地ふ、大和國添

上郡也、今も櫛本村、櫛枝村、云あり、共は和

余と相近し云云、此歌詞の意ハ、櫛井の丸途坂の

土を、初土は膚赤らけ、小底土は土黒し故三粟

乃其中つ土字也、万葉十六、丁右、櫛津の檜橋

あり、此所なり。

萬葉集十六卷、丁右、長忌寸意吉麻呂歌よ、

刺名倍尔湯和可世子等標津乃檜橋從來許
武孤尔安牟佐武

同四卷 十七 志貴皇子御歌よ。

大原之此市柴乃何時鹿跡吾念妹尔今夜相

有香裳○按市柴ハ標柴也推柴楯柴なごりよお

万葉 十二卷廿 小名奈良志婆ハ標柴とい書

たゞるも伊知此といふ語意を考ふ伊知ハ木

の名伊知此ハ實れ名の事と記すゆゑは新撰字

鏡よ一此乃木といふ和名抄よ標を撰る林を伊

知此乃加佐といふはハちを然て此歌古今六帖

五うちまてあつ同六いちの歌なごり載たり。

同八卷 五十五 若櫻部朝臣君足雪歌よ。

天霧之雪毛零奴可灼然此五柴尔零卷乎將

見○按市柴五柴通ハ一々よ久久少ておとなる

事なり。

同十一卷十一丁左。

路邊壹師花灼然人皆知我意嬌○按壹師の

花とよめ又志と比は横に通ふ音なれど伊知比

の花外此歌古今六帖六卷いちの条に載る。

果の句妹ハテよイモあひイモもとイモよイモ化イモとイモ。

又四十丁右

道邊乃五柴原能何時毛何時毛人之將ユルサムコト縦言

乎思將待○按此歌古今六帖六卷芝代条に載る。

果の句時をイモしイモとイモ人イモ小化イモ了イモ傍イモよイモ異本イモあイモとイモ。

あイモとイモむイモ小化イモとイモるイモよイモ注イモしイモとイモ抑右の二歌六帖

よ草の部イモに載イモたるイモは道イモの邊イモのイモと云詞イモよイモ草乃

尚イモの事イモとおイモもイモ一イモふイモ成イモべイモ一イモ尚イモをイモ新抄本草上卷四十九丁

左草部イモ下イモ尚實仁謂音一名イモ蒨實出蘇和名イモ以知故注

此云云和名抄十四行旅具部行纏の条に新抄本
 草云商傾井反和名以知比今俗編商為行纏云云
 和漢三才圖會九十四本卷濕草類部小商麻稱以
 知比俗用市尾字本綱商麻多生卑濕處人亦種之
 苗高四五尺葉大似桐葉團而有尖六七月開黃花
 結實如半磨形有齒嫩時青老時黑中子扁黑狀如
 黃葵子嫩時小兒亦食之其莖輕虛潔白北人取其

皮以績布及打繩索又以莖蘸硫黃作焯燈引火甚
 速按商麻西國有之日向薩摩多種之四國亦少有
 之九州土產其葉微似胡麻葉大有鋸齒然本草綱
 目似桐葉者未精乎其以下如上說剥皮織布脆於
 麻易裂打大繩為碇紐海船必用之具以亞加賀芋
 亦為蔴席之縱甚勁強而難截斷かきみえりあれ
 ち道邊に生る草とて定むる。

與清曰熊檮甘檮標同物少々、今世九州二島より
 マテバシヒとも、マテともいふ木之伊勢少々
 イチヒとも、イチカシイともいふ、古事記傳より
 熊檮を白檮ともいふ、白檮ハ真檮の義少々、總
 之檮をほめていふ稱なれば也、歌ふも久麻加志
 倭建 波毘呂久麻加志、雄略 甘檮乃丘、式部卿
 命 是忠 命 是忠 命 是忠
 大和本草 十二卷卅 雜木類部、マテバシ
 三丁左

ヒ、檮ノ一種ナリ、葉ハ檮ニ似テ厚大ナリ、色深青
 也、面ニ有光滲背ニハナシ、木理モ似檮、屋材トシ、
 器ヲ作り、舟ノ櫓トス、最ヨシ、其用檮ト同ジ、一類
 別種ナリ、實モ檮ヨリ大ナリ、熊トス、民ノ食ヲ助
 ク云云、和漢三才圖會 八十七卷 山果類部、鈎栗、
 以知此、甜檮子、鈎標、巢鈎子、倭名抄、標訓、以知此者、
 非也、標者椽也、本網鈎栗即檮子之甜者、其状如標、

又謂之鈎棟生江南山谷木大數圍冬月不凋其子似栗而圓小按鈎栗葉比于楮子略薄硬有鋸齒子形似椎子而有縱理鈎栗味甜凡楸鈎栗椎子三物株相似呼供器俗云云かど久之たす平戸侯の江戸鳥越の邸に大木二本あり榿カシより葉大すく幅二寸余長七八寸に及ぶし有一面青くはやあしく裏ハ枇杷の葉裏のやまに似て毛あり夏

れ初は栗花の如し花咲て散るの後花莖をとりて残るもの明年に至る椎子は似たり實は結ぶ今年無とおしるは明年椎子の如し實生ゆゑマテバシヒとも呼ぶなり其實生しればくも色白くゆゑ食ふをうは薄紅く蜀黍色也味も栗よりや劣りて澁は氣添たり平戸邊はいつおらく了小児常よとて敢民家食料は供ふ木此性ハ赤

櫛白櫛シロシはくはくふれを腕ウデは方カタれより門入平戸の

藩士岩永前明對馬の藩士國分尚式ナカノシの

了マツルれまゝと六位の笏シヤクは位イはるふ飛驒國の位山の一

位イれ木といふあは彼國ふらアラギといふ八雲

御抄ミテガキ五卷九丁よ、くくく山飛驒いやたのれ六

位イ笏木伐之山也云云愚記ウチガキ永正五年三月四日の条ノチよ笏木合

奉前内府被進殿下可被當御刀由申之此木當年

姉小路三品送之飛驒國位山之櫟木也新作之時

被當三公之刀云云十一日前内府實陰狀到

来先日進殿下笏木被付刀目賜之被寫富家殿御

形云云令祝著者也前内府依外戚所傳進也云云

西三條道遙院實隆公雪玉集六卷卅雜部六丁右飛驒

の國司少基綱卿位山のりらゐの木字笏シヤクれ

うよみせられけは

進殿下

所傳進也

セノオスノ字イハレモ
濁和点ヲ脱ス

位山標イニキヲとよまてこがたうくそこ字が
 のくまよらうそくイニキヲ、雍州府志七卷一丁左、
 多以飛驒位山標木造之標イニキヲ与一位倭語相同故取
 一位之義而祝昇進之謂也云云梅窓筆記上卷三丁右
 小一位ノ木今飛驒ノ國ヨリ箸ナドニ作りテ都
 二来ル木ヲイ千井トイ一ド標ニアラズアラ、
 キナリ物産者流ノ説ニ廣東新語ニアル水松ト

云モノニ形似タリ位山ニ生スルヨリイ千井ノ
 名アルナリトイヘリ云云大倭本草附録諸品圖
卅五丁左小圖を出し云く一位木ト称ス作笏者與
 標別也云云イニキヲなるふあれたらうやれ木
 鈎栗水松コウリスノスギシマの二種あり草クサノ苘麻クワイマありいばれり似
 たる和訓ワクンも鈎栗ハ伊知比水松ハ伊知井苘麻
 伊知毘イチヒといふ事と差別知ライズクべし

第三白楮血楮

日本紀景行紀天皇御歌小弊遇利能夜摩能志羅
 俄之餓延塙于受珥左勢云云○按古事記景行記
 倭建命御歌子幣具理能夜麻能久麻加志賀波衣
 宇受尔佐勢云云まゝ雄略記天皇御歌子幣具理
 能夜麻能許知基知能賀比尔多知邪加由流波比
 呂久麻加斯云云やまゝあるを思ふは熊禱を白楮

ともいふ也そは白楮ハ真楮ふて楮をほえたる
 總名也真は羨也宇万字約て万といひ又通ひて
 未といひて御酒水篤未山未谷などの未られ也
 又真薦真小薦真葛真木真榛真金などの宇万と
 いふづきま省たる也然る志良と万と通ふよゝ
 白木綿を真麻木綿といひ白萩を真萩といひ
 白銅鏡を真清鏡といふ類おろろも萬葉集三卷

廿丁 高市連黒人歌、白菅乃真野乃榛原云云同
左 妻答歌、白菅乃真野之榛原云云同七卷
丁左 白菅之真野乃榛原云云、あまの白と真と通ふ
 のくはけく枕詞とせし也同七卷
丁左 白菅
 尔丹保布信土之山川尔云云倭姫命世記
廿二年 白濱真名胡國云云、あまの白鳥之真野國云云、
 とも白と真と通ふ縁語もあはれくさるるなり續

日本紀廿八卷
廿四 延暦四年五月丁酉詔、臣子
丁左 之礼必避君父諱此者先帝御名及朕之諱公私觸
 犯猶不忍聞自今以後宜並改避於是改姓白髪部
 為真髪部山部為山代とあり也白と真と通ふゆ
 ゑ、白髪を真髪と改し也新撰姓氏録の真髪部
 も古事記雄略記の白髪太子の御名代の白髪部
 を改たる也石川年足の墓碑の攝津國島上郡白

髮カミ郷ノ、和名抄ふ、真上ホカと見え、常陸風土記
 の白壁シラカベ郡ノ、和名抄ふ、真壁ホカ倍ハカとあり、いづれ、真
 と白シラと通カヨふ證也。又白雪シラユキハ真雪マユキの義なるを未雪ミユキ
 とひい、白シラ虚ソラ空ソラ字未空ミソラといふ類ハ、白シラ字未ミといひ
 たる也。かれハ白シラ檀カシハ真檀マ少シて檀カシ其種類ヲほえ
 とも總名なる事疑シづく、あはれ。

萬葉集十卷 五十九 丁左 冬雜歌

是引山道不知白杜アシレビキノヤマヂモシラカシノエダモト枝母等ヲ乎ハ尔雪ニキノフレハ落者バ
 或云枝毛多和ニクエダモタワ多和ワ右柿本朝臣人麻呂之歌集出ニ
 也。但一首或本云三方沙弥シ作云云。○按白杜シラカシ枝シ
 今俗ハ白シラ檮カシ赤アカ檮シといふ。白シラ檮カシふとあり。今のは
 木質キノハダの白色シロキ赤色アカキハ依ヨりて稱ナなる。古代の歌ハ
 伐キリ了木質キノハダを檢察シて、白シラ檮カシといふ。ふあり。次ツに
 打ウ見たる息サマをほえ、真マ檮カシといふ。通カヨふ。

白^{シラ}檮^{カレ}といふ^ハなる^ハなり。又^ハ白^{シラ}管^{スゲ}の真^マ野^ノと^ハい^ハく^ハも^ハ枕^マ
 詞^ノを^ハ契^ノ沖^ノの^ハ管^{スゲ}ハ^ハ干^{ホシ}乾^カも^ハ白^{シロ}く^ハち^ハ乾^{ホシ}く^ハの^ハゆ^ハ急^ノ白^{シラ}
 管^{スゲ}とい^ハふ^ハち^ハる^ハり^ハい^ハふ^ハれ^ハは^ハる^ハ干^{ホシ}乾^カ一^ハたる^ハ色^ノ
 を^ハ出^イて^ハ今^{イマ}生^{オヒ}茂^シたる^ハ管^{スゲ}ハ^ハち^ハる^ハせ^ハら^ハる^ハく^ハあ^ハ
 り^ハ糸^ノが^ハ白^{シラ}と^ハ真^マと^ハ通^{カヨ}ふ^ハ縁^ノ語^ノと^ハ白^{シラ}管^{スゲ}の^ハ真^マ野^ノと^ハは^ハ
 づ^ハら^ハる^ハハ^ハ真^マ檮^{カレ}字^ハ白^{シラ}檮^{カレ}とい^ハふ^ハこと^ハち^ハる^ハ事^ハち^ハり^ハや^ハ
 此^ノ歌^ハ拾^シ遺^シ冬^ノ新^ニ撰^リ朗^シ詠^シ雜^ノな^ハり^ハ載^ルて^ハ四^ノ句^ハと^ハい^ハふ^ハ

今^ノ葉^ハ少^ク不^レ作^ル人^ハ丸^ノ家^ノ集^メ初^ノ句^ハ二^ノ句^ハ山^ノ
 の^ハい^ハふ^ハこと^ハと^ハい^ハふ^ハ四^ノの^ハ句^ハ枝^ハ少^ク葉^ハ少^ク不^レ作^ル
 たり^ハ記^ス

古今六帖六小

あり引の山よ生たる白檮の志くどなる人乃
 くらよなりのと○按此歌後撰雜一少く載て躬恒
 の歌なり人のを人哉不作少躬恒集ふは志く

さか入ふとあま

又

志書のけきふく消し一足引の山路まこれ
ふるみまふづ集○按此歌後撰雜三に載て敦忠
け歌等下け句ふみまふづまよはる

後拾遺秋下二法印清成

そまぢるる秋の山づま白の乃下まゆらふ

そまぢるるけれ○按此外新撰六帖六現存六帖夫
木抄雜十一なまぢるるまめ白樫の歌乃所見枚舉に
づまぢいづれ種カシの總名ま一種ヒトクサを指サせま
あまぢ

枕草紙 春曙抄本三
卷七丁右

木まといふ条ま志書のなま

いづまのまて深山木の中まいづまぢるる三
位二位のうのぢぬまむまぢるるまぢるる

人のみまゝに、あざた葉の、をさうり、まゝの、やうに、
 ばつ、あゝお、いつ、お、まの、ゆり、たる、よ、ん、ま、
 られ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 清く、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 とう、あ、れ、ち、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 の、歌、を、い、つ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 與清曰白檜也今俗より赤檜白檜万天標マテノイモなる

これ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 皆、總、名、の、白、檜、と、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 草、十、二、卷、冊三、丁右、木、色、白、ク、木、ノ、姓、子、バ、ク、シ、テ、ツ
 ヨ、シ、鎗、ノ、柄、ニ、用、フ、其、外、器、ノ、柄、ニ、ヨ、シ、最、良、材、也、
 葉、細、ナ、リ、實、ノ、味、赤、キ、ニ、マ、サ、ル、赤、楮、ハ、白、楮、ヨ、リ
 葉、大、ナ、リ、木、色、赤、シ、木、ノ、性、裂、ヤ、ス、ク、折、ヤ、ス、シ、白
 カ、シ、ニ、劣、ル、然、レ、氏、是、亦、器、ニ、作、ル、ニ、ヨ、シ、白、楮、ノ

實ハ甘ク味優ル赤楮ノ實ハ澁シ味オトル材實
 トモニ白楮ヨシ白楮ノ實ヲ多ク空地ニ蒔ベシ
 民用ニ利アリ云云本草啟蒙廿六卷
丁三 鈎粟
丁左
 シラカシ一名菓栗事物楮子ノ條ノ集解
本草綱目廿卷
 五十二 二謂ユル麩楮ナリ其葉ノ形狭小ニシテ
丁右
 柯葉ノ如ク鋸齒リ實ハ血楮ヨリ微大ニシテ
苦味少クシテ食フベシ材ハ白色ニシテ血楮ヨ

リ強シ又數品アリ云云なごいすたれるめ關東小
 麩楮シラカシアルおふくマテバシヒはみ麩楮
 小實結事少一對馬平戸邊ハ此實イと多く結
 民食料ニ供ふ其製法ハ搗ク搗ク水ニ漬シ澁味
 を去リ後ホシ干カ乾ホシ粉ミみミ糕ニ造ル永年貯ルふ
 を全果ノちレ俵ニ納メ清泉ノ流ヲをレ包ミ圍カ
 て其中ニ沈メ置ク數十年ヲ経テ腐敗セる事

本草綱目卷三
 廿五

わろく滋味自然^{オノツカラ}は鮮^{サシ}る其味淡^{アス}く新粉^{アヲ}はほそなり
實^ミは救飢^{セウキ}の良果^{リョウカ}なれど彼國^{ソノクニ}の種^{タネ}を得^{トク}て東國^{トウクニ}に
植播^{ウヅホ}さるるやまさむなり木^キは性^{セイ}は櫛類^{シブイ}の最^{トモ}一^ト
ま^マ武器農工^{ブキノウ}具^クの柄^エは用^{ユウ}了^{リョウ}肥前^{ヘノ}甘草^{カンサ}島^{シマ}より
出^デる鎗^{シヤウ}長刀^{チヤウ}の柄^エの良材^{リョウサイ}と成^{ナリ}

第四加多^{カタク}檉^{セウ}

新撰六帖^{シンセンロクテウ}六^{ロク}のかさぎの歌^{ウタ}五首^{ゴシュ}は中^{ナカ}のうたのうた

花^{ハナ}とよみたる三首^{サンシュ}ハ萬葉^{マンヤク}十九卷^{ジュウク}のうたのうたの花^{ハナ}を
思^{オモ}ひ誤^{アタ}りたるものやて取用^{トクヨウ}がこゝろそち夫木抄^{ソウジ}雜
八^{ハチ}井^イの糸^{イト}は萬葉^{マンヤク}の歌^{ウタ}を載^{ノセ}たるやかこゝろの花^{ハナ}を
かこゝろ乃^ノ花^{ハナ}と書^{カキ}るや知^チ了^{リョウ}九條^{クジョウ}知家^{チケ}入道^{ニョウ}
小車^{コクルマ}のころろ轉^{マユ}るころかこゝろのいづれは
よ記^{ヨキ}人^トのあは信實^{シンジツ}

かつら又^{マタ}みよたさるるかこゝろはれり人

此二首は万葉の...
別名は...
二種...
シノキ...
赤白二種...
總名ナリ...
タギト呼ブ...

皆血楮ナリ...
厚久粗キ...
ノ數品アリ...
二寸許...
梢ニ生ズ...
熟スレバ...
食フニ堪ズ...

四五
知生
送

カレアリ其材色白シ云云。なごみたる血楮は、
 木質他の楮より堅^{カタク}して却^{カキ}て折安^{ユキヤス}けれど、これ
 字^{カタカレ}堅楮といふとを以^カて、猶^{ナト}兩品^{フタタチ}のこころなる名
 ありとくおらぬ。古事記日本紀字は、先^カ楨^{カレ}の
 いづれを、麩^{シラ}楮^{カレ}血楮^{アサギ}の事^{コト}や、そは熊^{クマ}楨^{カレ}甘^{アマ}楨^{カレ}赤^{イナヒ}楨^{カレ}は
 どの別^アの名字^ナ著^アる^ラといふれを、ち^カり^レ白^カ楨^レ乃^ニ
 生^ナなる^ル地^チの楨^{カレ}の生^オきる^ルより名^ナふ^ル負^オて^ルなる^ル。

第五海部の文

源氏物語

湖月抄本四
十四丁右

玉鬘^{タマカサ}のあて花田^{ハナノ}のふぶの

おき物^{モノ}おき^カ成^ナま^ルた^ルおん^ノた^ルれ、白^シのやある^ルあ
 ふ、ゆ^キの^ノた^ルふ^ルおん^ノた^ルれ、友^{トモ}の^ノ所^{カタ}方に^ニ云^フ云^フ河^{カハ}海^{ウミ}
 抄^シの^ノ海^{ウミ}浦^{ウラ}文^{モン}大^{オホ}浪^{ナミ}の^ノこ^ノを^ヲお^ノり^ルなり^シ云^フ云^フ花^{ハナ}鳥^{トリ}餘^ユ
 情^{ナリ}の^ノ海^{ウミ}賊^{ゾク}も^モ大^{オホ}ち^チの^ノふ^ルも^モや^ヤ貝^{カイ}や^ヤな^ニど^トお^ノり^ル
 文^{モン}なり^シ云^フ云^フ岷^ミ江^{カハ}入^ル楚^ソの^ノ河^{カハ}の^ノい^ハ海^{ウミ}浦^{ウラ}ま^ル大^{オホ}浪^{ナミ}

みくもみおれちり秘大海日みる貝へ夜の御方を
花散里也花海賦ハ大浪日みるやそれそこの貝を
おりたるちり云云。

紫式部日記 傍注本上巻 日みるちり松の實乃
十一丁右

もむ裳ハかみふちおろし大海の浪日みるか
きり腰ハく物か草字ぬいさ云云又十八
白の御乃御衣をもかみふちをさるる云云蓬萊ちり

例の事あれどいふものうらまのりさるるを

云云○按るの文紫花物語初花 四十二 子を出た
丁右

了初花の巻ハまて紫日記を取て出たる

續世継 二卷廿六丁右 白河花宴ハ裳ハくび深字地
少

るいふちむらびて月夜やさるる鏡字志
くふのりて花のかみとさる水ハとさるれしめ

云云○按古本ハはかみふち一小化二たね

据用の。本の。...

禁秘抄上卷八 清凉殿置物御厨子の条下、笛、管

時、海部云云注、海部藻類ヲ時く、も、海辺之体、

或、貝類ヲ時ト一リ云云、

新棟樂記群書類従百卅 六郎冠者、繪師長の段、

山水、野水屋形木額海部立石屏風障子軟障扇繪

等、上手也云云、

藻鹽草十七卷、色部九十段、淺花田のかぶの文、を

なご大波を織たる、源氏云云、

空穂物語樓の上上卷五十九丁左、

ば、かう、乃、裳な云

云、○按、次、了、の、お、ろ、の、裳、は、海浦の、

たる、裳、

紫式部日記傍注本上卷 廿二丁左、綾ゆる、乃

おとれくすまろ、無きんイロコのあま色イロコをハまき
 かもど、みね五イッつてウサチ襲ウサチとまハみちかおちり、おん
 うみのほら蒙モの水れいろもねやうよあきく
 了、紐コシは固カタ文モン字モンどおやくハ志シ云云。○按お
 ほらみのまき蒙モハ空穂物語のほら乃おらうみの
 蒙とおね、みね文、榮花物語、初花の巻 四十三 丁左
 は、志シどれおちり、まのあき、おやうみのまき、

みねのいろあきや、のまきく、これハ、まの
 うんぬ、とある。

與清曰、かぶの文は、海浦カイブの字音、海賦カイブと、海
 部ブ書カクハ借字なり、大波オホナミの打ウチよを、あきヤ、あき
 あれ、藻モも貝カイもあれ、海ウミの浦邊ウラベの形カタチ字ジつるな
 又、大海オホウミのまき字、画エガキたる、有アリ、それを大海オホウミの
 蒙モち、心ココロ得トク、海部カイブ、太刀タチも、鞘サヤ子コ海部カイブ字

